

金町団地の50年



2008年 公団 金町団地自治会

公団 金町団地の概要

★ 所在地と周囲

公団金町団地は、東京の東の外れの葛飾区東金町にあり、隣は江戸川を越えると千葉県松戸市で、北に行くと埼玉県三郷市です。南は映画「フーテンの寅」でお馴染みの柴又です。

所在地	東京都葛飾区東金町2丁目12番、13番、14番、23番、25番
最寄駅	JR常磐線 金町駅 徒歩8分

入居の開始は、1958年（昭和33年）ですが、一部建替が2001年（平成13年）にあり、戸数に変動がありました。

★ 入居開始当初

棟数	31棟
戸数	226戸

各棟が、6戸または8戸で連なった、いわゆるハーモニカ長屋の2階建、庭付きのテラス住宅です。

間取は、2DKでしたが、1977年（昭和52年）から庭に1部屋の増築をしました。



★ 建替後の状況（平成20年4月現在）

棟数	既存棟6棟、新棟5棟
戸数	312戸

一部の棟が取り壊され、8階建ての高層になっています。





◎まえがき

50年の長さは、誰しものが尽きせぬ万感の想いがあるものかもしれませんが、歴史とはなにもなかった時の方が多かったというとらえ方もあります。

金町団地の半世紀もそれに近いといえますが、それでも金町団地の歩みのなかでどうしても忘れられない、以下の3つの出来事を中心に、この小冊子を纏めてみました。

- ① 団地そのものの誕生（昭和33年）
- ② 各戸一間の増改築（昭和52年）
- ③ そして団地全体を揺るがした建替問題（平成4年～11年）

*金町団地の誕生と昭和30年代

金町団地は前世紀の1958年（昭和33年）2月に入居が始まりました。2階建てのテラス住宅が31棟、全部で226戸。すべて2DKの間取です。

そのころの常磐線金町駅には、北口がなく、南口から徒歩17分かかりました。当時の地名は「葛飾区水元小合町」でした。現在の東金町二丁目になったのはその後です。団地の敷地面積は29,775㎡（約3ヘクタール）で、当時公団から懇請されて農地を売却した近隣の古老の話では坪3,000円台、1㎡当り900円余で譲渡したとのこと。戦後の住宅不足が続くなか、1955年（昭和30年）に国策で各都市に中堅勤労者向け賃貸住宅の大量供給のため設立された日本住宅公団により建設されました。金町団地は全国で入居を開始した団地の70番目ほどで、東京23区内では7番目に建設された団地でした。

当時の家賃は5,300円。家賃の5倍以上の収入が入居条件でした。抽選で最初に入居したYさんは「収入基準を満たすために親元からの仕送りあり」と装ってやっと入居できました」と懐かしんでいます。東京で大卒初任給が1万3千円前後、30才くらいの会社員の給料は2万円余でしたから、3千円位といわれた民間の家賃よりはかなり高い家賃でした。

*日当たりもよく住み心地のよい団地です

当然ながら建物は新しく、当時の民間賃貸住宅には殆どなかった浴室、水洗トイレ、そして狭いながら庭もありで、日当たりもよく住み心地のいい団地です。

日本が、高度経済成長期に入り始めた時代で、希望に満ちた若い夫婦や子育て中の世帯が中心でした。広場で遊ぶ子供の元気な声や時には泣き声も響く、明るくて新鮮な団地でした。

団地の北方には、田圃や畑が多く、今から280年程前の1729年（享保14年）に江戸幕府（8代将軍・徳川吉宗）が灌漑用水の調整池として開削した広大で古色豊かな「小合溜」があって江戸時代を偲ばせていました。（なお、小合溜は、1965年（昭和40年）に水元公園として整備され開園しています）



* 団地周辺の生活環境は？

団地をとりまく道路の多くはまだ舗装されておらず、雨の日などはぬかるんで長靴が必要でした。街灯も少なく、夜遅くなると不気味な道でした。当時金町駅の北側は大きな製糸工場の跡地があり北口がありませんでしたから、金町駅に行くためには、駅東方にある常磐線のガード下を潜り遠回りですが南口へ出る日々でした。田圃の中にできた団地のため、近くに商店がほとんどなく、日常の買い物も同じ行路で駅の南側にある「すずらん通り商店街」までの生活でした。多くの道路は片側に幅1 m余のドブ川があり風向きによっては臭気が漂い、蚊の発生も多くて網戸もなくクーラーなどなかった夏には蚊帳を吊っていました。団地脇の池や沼からはエビガニが這い上がり、カエルの合唱が聞こえていました。入居時には団地の近くの「原田小学校」はまだなくて、当時6年生だったK君は毎日常磐線のガードを潜り遠方の末広小学校に通っていました。翌1959年（昭和34年）によりやく原田小学校ができて児童の親子ともども安堵した時代でした。

* 「三種の神器」が普及しだした時代 — 団地の子供たちもテレビに夢中—

昭和30年代には、テレビ（白黒）、電気冷蔵庫、電気洗濯機のいわゆる「三種の神器」が普及しだしました。子供たちがテレビの「月光仮面」や「鉄腕アトム」に夢中になり、大人は「力道山のプロレス」と団地でも新しい生活様式が定着していきます。

日本経済の高度成長がはじまり、1957年（昭和32年）12月の5千円札の発行につづいて団地誕生の1958年（昭和33年）12月には1万円札が登場した頃です。

ちなみに、昭和33年の物価の一例です。

はがき	5円	食パン	1斤	30円
散髪代	150円	卵		9円
新聞代	330円	米	1升	90円
国電 初乗り	10円	ビール 大瓶		125円
テレビ	6, 7万円	コーヒー		50円

* 金町団地自治会の誕生 1959年（昭和34年）

1954年（昭和34年）6月、金町団地自治会が発足しました。当時の詳細な活動記録がないため、個々の内容は明らかではありませんが、2棟ごとに一人の連絡員を決め、自治会役員は持ち回りで選び、団地内の連絡や子供会の活動をしていました。

昭和30年代に都市やその周辺に建設され、入居をはじめた公団の賃貸住宅団地は全国でおよそ380団地、約17万戸と記録されています。

入居して50年 Yさんの手記(昭和33年入居)

待望の公団住宅へ昭和32年12月に入居が決まり、翌年1月に結婚の式場を決めていたところ、公団側から入居は33年2月に延期するとのこと。式場はキャンセルせずに2月に入居しました。

水元公園の桜土手からこの団地がきれいに並んで見えたことがすごく印象的でした。

二階の部屋からは金町駅のホームが見え、夜には牛の鳴き声が聞こえてきました。後で判ったことですが団地東側の15号棟の前に沼地があり葦が茂っていました。そこには食用ガエルが住みついでいてその鳴き声が牛の鳴き声と全く同じだったのです。団地の近くに牛舎があるものと勘違いしたくらいでした。

お隣のHさんもこの公団が抽選で当たってから式をあげて私たちと同時に越していらしたのです。

私も奥様も仕事を持っていましたので、毎日帰る時間を決め、お互いの家に入るときは棒を持って二人で二階から偵察し洋服ダンスの中まで誰か潜んでいないか確かめ安心して家に入ったものです。

数年後、長男が幼稚園に通い出した雨上がりの日など沼からエビガニが通路の真ん中でハサミを持ち上げて通せんぼし道をふさぎ、その度に長男は家に戻って来たこともありました。

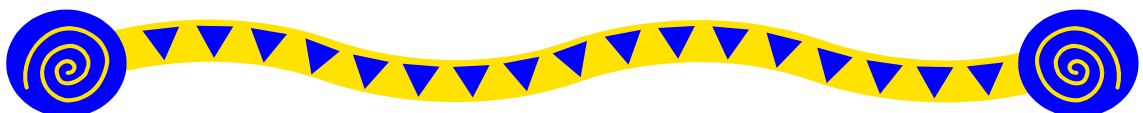
自治会の会計をしていたとき、各棟ごとの会費集金の際集金袋を作り連絡員さんが集めやすくしたことなど。

昭和47年に金町中学校が現在の東金町小学校より今の中学校に引っ越しのとき、私は中学の役員で団地の集会所をお借りしてPTAの役員さん達と先生方のお弁当作りもしたことがあります。

私は主人が生きていたらこの公団と共に50年の金婚式だったのです。

団地の建て替えのとき、親しくしていた方は皆さん去って行ってしまいました。私もどこか別の場所に行こうとしましたが、次男がどうしても育ったこの団地から離れたくないと申し舞い戻ってきました。

主人は亡くなる前に若い役員さんが増えることを凄く気にしていました。





*昭和40年～60年代の金町団地(52年に6畳間を増築—2DK⇒3DKへ)

昭和40年代になると金町団地の子供の数は50人はこえていました。

当時の幼稚園の送迎バスは団地の子で一杯となり1台では不足2台も来るほどでした。団地だけでなく近辺の児童も増え、原田小学校では午前と午後の二部制がとられていました。

金町団地では、干し物ついでに隣人と庭ごしにおしゃべりをしたり、草木を分け合ったり、母親同士の会話もはずんでコミュニケーションは広がっていきます。



1967年(昭和42年)には金町駅の北口がようやく開設され、1969年(昭和44年)には駅に南側への通り抜けの地下道もできて通勤・通学・買い物が便利になりました。

昭和40年代後半にはドル・ショック、石油危機そして「狂乱物価」の時代を迎えて親は大変でしたが、子供たちはそんなことにはお構いなしです。団地の広場で毎日のようにブランコや鉄棒に興じ歓声をあげて走りまわるのが当時の団地風景でした。

1977年(昭和52年)に各棟・各戸に6畳間(一部の棟は8畳)が増築されました。従来の狭い2DKから3DKの間取になったのです。それに伴い家賃は6千円台から一挙に2万円台になりましたが、子供のいる家庭にとってはなによりの朗報でした。

その後、団地では平穏な時が流れ、昭和時代の終わりに近づくにつれて子供たちも成長し、児童や幼児の数は次第に減っていきました。そんな、平和な日々、公団はなぜか入居募集を停止しました。

*団地生活は新たな段階へ

そして金町団地のすべての居住者の生活を大きく揺るがした住都公団（当時）による強権的な「金町団地建替」の時代になったのです。それは日本経済のバブルが崩れた20世紀終わりの10年間の出来事です。

今までの3DKで5～6万円の家賃が建替後は3倍になる計画を公団から強引な手法で問答無用に押し付けられ、住み慣れた団地を去っていった世帯は過半数をこえました。団地に残ったのは約80世帯（管理戸数の35%）に激減しましたが、「小さな団地の大きな住民運動」が展開されました。



お孫さんもよく遊びにくる(建替前)
お母さんはこの団地で生まれ育ち巣立ちました。



ある母親の手記 (昭和38年入居)

—昭和40～50年代の団地の子供たち

昭和40年代は団地の子供たちがとても多いときでした。昭和33年にあこがれの公団団地に入居した方たちには新婚の方も多く、ちょうどその子供達が幼稚園、小学生へと育ってきた時でした。

団地の広い公園にはブランコ、すべり台、うんてい、ジャングルジム、鉄棒や砂場などがあり、子供たちは嬉々として遊んでいました。

朝の幼稚園のお迎えバスも団地の子達でいっぱいになり、原田小学校も午前・午後の二部制という時もありました。

子供会では夏休みに広場でラジオ体操、スイカ割りに列を作り、野球部は団地旗とお揃いのユニフォーム、女子はポートボールでそれぞれ町会の大会に参加した事もあります。当時は団地のりさん0さんのお兄ちゃんが面倒をみてくれました。

夕方、親たちによばれる迄、女の子も男の子も歓声をあげて缶けりやかくれんぼで団地内を走り回っていたこと、とても懐かしく思い出されます。

その子達も今はパパ、ママになり、また社会人として活躍されていることでしょう。お孫さんもふえたことでしょう。

子供達の幼い頃、自分の若かりし頃を思い浮かべて書いてみました。



団地の子供野球チーム(S40年代)
勝っても？ 負けても元気一杯





◎ 建替闘争の時代

金町団地の歴史の中で、建替闘争の時代は特筆される出来事でした。

金町団地の建替闘争を振り返って見ましょう。



金町駅頭での宣伝！（斉藤委員長）

* 公団が行う建替の背景にあるもの

1985年（昭和60年）、当時の住宅・都市整備公団は、昭和30年代に管理を開始した住宅約16万戸を、「居住水準の劣化」を理由に建替をすると表明しました。しかし、もう一つの理由として、「土地の有効利用」が上げられます。昭和30年代に管理が開始された団地は、建設当初は辺鄙なところに建っていましたが、現在は、一般的に立地条件が良い所にあります。しかし、2階建て庭や広場などの空地が多く、居住者にとっては快適な棲家でしたが、この頃から、土地価格は著しく暴騰しており、住宅用地の取得方法でも無策な公団は、新しい住宅用地の取得が出来なくなってきていました。

そこで、公団は、古い団地を取り壊し、高層住宅を建て、居住者を増やし、また家賃もあげて収入も上げようと考えていました。

* 建替対策委員会の設立

他の団地でも建替が始まり、公団の一方的な建替の実体が明らかになってきていました。

まだ、建替団地に指定されていない金町団地でも建替が居住者に与える悪条件に対し危機感が生まれ、1988年（昭和63年）に「公団対策委員会」として発足し、建替に備えていました。

そして、公団は金町団地を、1992年（平成4年）7月7日に「建替団地」として指定し、これから2年の間に、金町団地の居住者は、“高い家賃でも金町団地に戻り住むのか”、“他の場所に引っ越しをするのか”と苦渋の選択を強いられる事になりました。

「建替団地」としての指定を受け、同年「公団対策委員会」は名称を『建替対策委員会』に変更して、金町団地自治会として公団交渉を担当し、今後、裁判の被告となる15世帯と共に建替闘争の中心として活動しました。

* 建替事業の問題点

外部から見ますと家賃の減額制度や高齢者世帯等の優遇制度など、現在の居住者を考慮したかの様に言葉をうまく使う公団の建替事業ですが、既存の居住者から見ると、高く設定された家賃は減額ではなく、3倍になるまで毎年上がり続け、高齢者世帯の優遇措置は条件が厳しくて、該当者が少ないなど、実態は建替でありながら居住者が住み続けることのできない公団の一方的な既存居住者追い出しの事業でした。

* 居住者を無視して建替事業を一方向的に推し進めた公団

公団の建替事業の進め方はまったく居住者の生活権を無視したやり方でした。例えば、独断的に作成した建替計画に従い、「説明会」という名の会合でも、居住者の質問を遮り、途中で打ち切る暴挙にでています。「話し合い」をするといいながら、公団ではそれは、名目だけの偽りの表題でした。

居住者が何回も公団に話し合いを求めても、無視されます。

ついに立ち上った金町団地の居住者は、地元葛飾区議会へも陳情・請願し陳情書も採択されています。

また、足立区にある西新井団地や埼玉県草加団地など他の団地でも公団の暴挙に対して非難の声があがり、これら建替対象となった団地では互いに横の連携をとり協力しました。

テレビ局・新聞社・週刊誌社などの取材も多く、どのマスメディアも公団へ改善を促す方向で「建替問題」を扱っていました。これらの報道は私たちの主張の正しさを証明するものとして勇気づけてくれました。



運動はさらに膨れ上がり、1994年（平成6年）

9月4日には「住まいは人権9・4」集会を、23区自治協などと金町団地自治会は共同主催しました。ビラ・ポスター・看板等の作成・配布の準備は大変な作業でしたが、多くの人の協力を得て短期間で行うことができました。

集会当日は500人近くの参加があり、集会後、金町団地周辺をデモ行進したことは金町団地自治会の活動上とても画期的なことでした。また多くの平凡な市民であった居住者にとっても、初めて参加するデモ行進でした。住民集会の大成功は、それからの運動を大きく支えました。

* そして、裁判へ

しかし、あくまでも居住者の声を無視する公団の態度はひどいものでした。男性職員二人で居住者の部屋に押しかけ、「建替に同意しなければ裁判」にかけるなどの「おどし」を日常に繰り返していました。

普通の生活をおくってきた人にとって、「裁判」の言葉は恐怖でした。おびえた居住者の多くがついに、泣く泣く建替に同意するようになっていました。

そんな厳しい状態ではありましたが、移転期限を過ぎても同意しない15世帯があり、公団は、1995年（平成7年）彼らに対して「建物明渡し」の裁判を起しました。

* 建替闘争と支援者

金町団地自治会は、この裁判の当事者である15世帯と共に、弁護士や自治協も加え支援者を増やし、法廷闘争と平行して、公団の監督官庁である建設省（当時）への抗議と霞ヶ関での宣伝、そして、公団本社への交渉の呼びかけ、さらに金町駅頭でのビラ配りと街頭闘争も行い、長期化する裁判と運動ではありましたが、力をつけ、活動は広がって行きました。



支援者には、止む無く公団の脅しに屈して金町団地を出て行った人や、新しい建物に入

居を望む人、さらに外部の賛同者などと幅広く参加されていました。

* 裁判の取り下げ、解決協定（一部棟残し）の締結

バブル経済が終わりを向かえ、公団も増大する空家や未分譲の不良土地の対処を余儀なくされ、裁判にも勝訴が望み薄くなった1997年（平成9年）公団がやっと話し合いに応じ、居住者との協議の結果「一律建替」から「部分建替（一部棟を残す）」で1999年（平成11年）3月協定を結び、公団は裁判を取り下げここに、裁判闘争は終わりました。

* 建替闘争の勝利が意味するもの

金町団地での裁判で、主任弁護士を勤められた田中弁護士は、こういわれています。

『金町団地の闘争は、裁判闘争を主戦場とした闘いではなく、裁判を通じて決着をつけようとした闘争ではなかった。「主戦場は大衆運動」というのは闘争を通じて一貫して流れた基調であり、それゆえに自治会・居住者が公団と解決協定を結ぶことによって闘争を收拾するという誇るべき成果が実現できた。

「国策」をかさにした一方的な「建替」を打ち破ったもの・・・それは居住者・自治会や近隣住民・町会などが、共同して展開した大衆運動だった。

金町の運動は、「住み続けられる金町団地」という共同の目標をすえ、だれからも理解と共感を得られる活動を展開した。

要求を実現しようとするなら、まず同じ国民に訴えて理解と協力を求めなければならない。自らの行動で呼びかけてはじめて対話が生まれ、共同が生まれ、確信が芽生えていく。その活動は日々の行動で試されるのであり、「裁判所待ち」だの「弁護士だのみ」だのの介在する余地がない。

金町の運動は、この大衆運動の王道を歩み、自らの手で解決協定を導き出したのである。仮に建替を行なうにしても、すべての棟を同時に行なう必要はなく、「建替えること」と「もとの団地に住み続ける」ことは十分に共存可能である。それこそが自治会と居住者が要求し、7年間の闘争を通じて実現しようとしたものであった。「小規模団地での一部棟残しははじめて」「公団と自治会の協定締結もはじめて」「公団が訴訟を取り下げるのもはじめて」という「初物づくし」のなかで実現した解決協定は、自治会・居住者の要求の正当性を示すとともに、「住み続けること」と調和した建替が実現可能であることを事実をもって証明した。

これこそ金町闘争の歴史的意味と言って過言ではないだろう。』



公団にとっては、金町団地は770,000戸の内の226戸という小さな団地です。しかし、その小さな力も団結によって巨大な国家権力の公団を打ち負かせた事例でした。



◎ 新棟に入居して

私達は2004年(平成16年)3月に金町第一団地に入居しました。私達が、金町第一団地の物件を見つけてからの出来事を記します。

公団の募集申込み



現在、公団の募集申込みは公団指定の施設、新聞の折込広告及びインターネットと様々な媒体で行われており、募集状況を全世界で見られることも出来ます。申込み資格があれば、アメリカにいても、インターネットで物件を確認し、申込みができます。私達は新聞の折込広告でこの物件を知り、モデルルーム会場で申し込みました。さて、皆さんはどのような方法で物件を見つけて申し込まれたのでしょうか？

抽選結果の確認

公団より郵送にて結果が送付されますが、インターネット上でも抽選結果を即時に確認できるようになっています。私達は最初にインターネットで抽選結果を確認しました。しかし、私達の抽選結果がインターネットで閲覧できるまで、予定時刻より数時間遅れました。最新のシステムを導入しても、体質はなかなか変わらないのでしょうか。

花見への案内

3月の入居後、すぐに「3号棟の前の公園で花見をします。新たに入居された4号棟、6号棟の皆様もどうぞ」との内容の案内が、ポストに入っていました。とても温かみのある団地と感じました。やはり、先に住まわれている方達が、後から入居した私達を歓迎してくれているのかとの心配がありましたので・・・その心配はなくなりました。

夏祭り

毎年、夏には祭りを開催するとの案内が届きます。運営は自治会、居住者のボランティアと、地域の協賛で行われています。最近では小学生高学年、中学生も運営に加わっております。また、参加者は団地居住者だけではなく、居住者のお孫さん、近隣住民も参加され、地域のイベントになっています。子供達にとっては、夏休みの良い体験として記憶に残ることでしょう。また、家族、近隣住民と居住者との良い交流の場になっています。



団地で花壇と芋ほり？

8号棟の建設開始までに、その空きスペースを広場&花壇として利用できるとの案内がありました。20名の居住者が、区画を借り、思い思いの植物を育てました。秋には団地居住者、近隣の住民に声をかけ、芋掘り&焼き芋のイベントも催しました。2004年6月から2007年7月までの3年の間でしたが、色々な方と出会い、金町団地でしか経験できないことでした。世話役の皆様、有難うございました。



居住者へのアンケートの実施と相談コーナー

自治会では、居住者へ住環境についてのアンケートを実施し、問題点を公団へ提示し、改善するように要求しています。一人ではなかなか実現できないことも、自治会組織として、交渉する事で、大きな成果が得られています。また、自治会役員のボランティアにより、相談コーナーを実施し、居住者から個別に悩み相談を受けております。

団地内居住者交流会

居住棟ごとに、交流会を実施しました。日ごろ、お会いする事の無い方が集まる機会が作られ、名前と顔を覚える事が出来ました。若い方、高齢者の方、お子様のいる世帯、単身世帯の方と色々な意見の交換が出来ました。

秋の避難訓練

秋には避難訓練が催されます。避難梯子での降下体験、消防署の協力による地震体験車での体験学習を受けました。もしもの時のためですが、実際に眼にして、体験することで日ごろの準備や訓練が大切なことを学びました。私達は早速、防災用具を購入しました。



年末の防犯パトロール

年末には、居住者のボランティアによる防犯パトロールを実施しております。地域住民が防犯に対する意識を高く持っていることを示すことで、犯罪の抑制に役立っていると思います。

居住者として、金町第一団地を選んだのには様々な理由があるでしょうが、快適で、安全な住まいとしたいのは全員が共通した願いでしょう。居住者が少しずつ、力を出し合い活動する「住民力」でこの先も居心地のよい金町団地にしていきたいと思います。



金町団地の50年（概要）

西暦	昭和	金町団地の動き	近隣の動きなど	社会の動き
1955	30年	・「日本住宅公団」設立(7.25)		・自由民主党結成(11月)
1958	33年2月	入居開始、31棟・226戸 駅より徒歩17分	原田小学校が末広小学校の分校として設立	東京タワー完成(12月)
1959	34年	金町団地自治会創設(6月)	原田小学校が独立して開校	伊勢湾台風(9月)、皇太子成婚(4月)
1977	52年	庭に一間増築開始。アルミサッシの採用。		自民党・派閥解消(3月)
1980	55年	・「住宅管理協会」設立(統合)		モスクワ五輪、日米など不参加
1981	56年	・「住宅・都市整備公団」発足(10.1)		日米「同盟」の解釈で外相辞任
1985	60年10月	・公団「昭和30年代の団地建替事業」の概要表明		日航機が御巢鷹山に墜落事故(8月)
1988	63年4月	「公団対策委員会」を設置		リクルート事件発覚(6月)。東京ドームオープン
1989	平成元年	・亀有団地で建替着手		消費税(3%)実施(4月) 「ベルリンの壁」崩壊(11月)
1992	4年	「建替対策委員会」設置(7月) 公団の「建替説明会」紛糾。居住者は継続を要求(9月)		PKO法成立(6月) 地価が下降へ
1993	5年	公団へ抗議活動。居住者集会など		細川内閣(8月)。Jリーグ開幕
1994	6年	「一時使用賃貸契約」更新最終日(9月末)。15世帯が更新拒否	近隣町会も公団の計画を非難	羽田一村山内閣。松本サリン事件
1995	7年	公団・15世帯を提訴(5月・9月) 第一回口頭弁論開廷。平成10年まで裁判闘争(9月)	団地内外の有志で「15世帯を支援する会」をつくり裁判傍聴、支援活動へ	阪神淡路大震災(1月) 地下鉄サリン事件(3月)
1996	8年	裁判傍聴・ビラ配布・公団への抗議・要請・物品販売の運動	⇒団地内「支援する女性の会」も諸活動へ	橋本内閣(1月)。欧州で狂牛病
1997	9年	公団が漸く協議の場へ ↓	↓	消費税5%に引き上げ(4月)
1999	11年3月	公団が居住者要求を受け入れ、裁判取下げ。「協定書」締結 「都市基盤整備公団」(10.1)		国歌・国旗法成立(8月) 銀行の大型再編成へ(10月～)
2001	13年6月	1～3号棟完成・40世帯が戻り入居。公募も開始	⇒別の40世帯は一部残しのテラス住宅に居住継続。	米国同時多発テロ(9月)
2002	14年	第2次4・6号棟の建設へ(5号棟はなし)	⇒「特殊法人等整理合理化計画」閣議決定(12月)	牛肉偽装など食品業界の不正事件。
2004	16年3月	4・6号棟完成。公募開始 独立行政法人「都市再生機構」設立(7.1)		新潟中越地震(10月) スマトラ沖大地震、津波被害
2005	17年	新入居世帯も一緒に夏祭りなど		衆院選・郵政刺客選挙(9月)
2006	18年	8号棟計画・機構と事前協議を開始	(年金保ズサン管理問題化)⇒	安倍内閣(9月)・参院選自民大敗(ねじれ国会)
2007	19年	体操、カラオケ、壮寿会等のサークル活動続く	「国民投票法案」成立(5月)⇒	安倍首相突然辞任(9月)・福田内閣(9月)
2008	20年2月	入居50周年。(8号棟建設中)		年金問題・道路特定財源問題～ イービス艦「あたご」が漁船と衝突(2月)

みんなが 住み続けられる



金町団地



1958年 ~ 2008年